

第4回 共創言語進化セミナー

日時 2020年10月13日（火）17:30-18:30 JST

場所 ZOOM（参加ご希望の方は登録サイトから登録下さい。会議室情報を追って連絡いたします）

言語 日本語 登録サイト：<https://forms.gle/ob2xCosKdSuBqtiR8>

講演者 小林 春美（東京電機大学大学院教授）



米メリーランド大学大学院にて
Ph.D.（発達心理学）。
東京電機大学理工学部教授。
新学術領域「共創言語進化」
認知発達班班代表。言語学会会長。
言語発達を、非言語情報である
ジェスチャーや視線方向との
観点から研究している。

ヒトは言語を使うようになる前でもジェスチャーなど非言語情報によりコミュニケーションをしていたと言われている。その後ヒトは言語を獲得したのちも、ジェスチャーを手放すことなく、両方を使うように進化した。これはなぜなのか。言語では表現しづらいことをジェスチャーが表現できるから、という補完の機能の説は納得しやすい。しかしこの説では、言語と一見完全に重複している状態でジェスチャーが産出される場合について説明できない。

本講演では発話と同時に産出されるジェスチャー(co-speech gesture)に注目し、redundantなジェスチャーは、言語構造解釈の曖昧性を低減できるから、という新しい説を提案する。日本語の「黒いしっぽの大きな猫」という句は、複数の意味解釈が可能である。

成人にこの句を言いながらジェスチャーをしてもらうと、ジェスチャーの産出は指定された異なる意味を持つ言語構造によく対応することを見出した。言語発達の観点からもジェスチャーが言語構造の曖昧性低減に役立つことが示唆されることから、言語と重複するジェスチャーが言語進化に果たす役割を考察する。

参考文献

- Kashiwada, K., Yasuda, T., Fujita, K., Kita, S., & Kobayashi, H. (2020).

Syntactic Structure Influences Speech-Gesture Synchronization, *Letters on Evolutionary Behavioral Science*, 11(1), 10–14. DOI: <https://doi.org/10.5178/lebs.2020.73>

- Kashiwada, K., Yasuda, T., & Kobayashi, H. (2019). Do people use gestures differently to disambiguate the meanings of Japanese compounds?. *Cognitive Science Society Meeting pp. 527-531* (Student Travel Grants Award受賞)

